ヘルムート・ケーニヒ：19世紀前半におけるフリードリヒ・フレーベルと小市民民主主義の結びつき　第四部

人文学部　教育・臨床心理学科　教授　勝　山　吉　章

7．小市民民主主義に敵対する反動の闘争の側面としての幼稚園禁止令

幼稚園の広範な普及、1851年プロイセンでの、他のドイツ領邦にも拡がった幼稚園の一般的な禁止、ならびに1860年のその全面的な廃止は、当時の経済的政治的発展との連関のなかでのみ理解される。

1849年のプロイセン反動が、「革命の死刑執行人の役割」を演じた後で、「テロの恐怖政治」がはじまり、「革命派への血の粛正」が続いたが、反革命的な貴族的支配の制約下で資本主義の迅速な展開が起こった（1849-1859）。この時代の全ての政治的生活は、「警察の横暴、憲法違反、権利の無政府状態を手段として民主的な国民運動を抑圧したユンカー的官僚的反動を特徴とする」なかにあった。

幼稚園禁止令は、一方においては、とりわけ組織化する労働運動（ケルン共産主義者会議1852年！）に対する、また、小市民民主主義やあらゆる他の抵抗勢力に向けられた迫害の総合性から理解されねばならない。他方、禁止令の原因は、フリードリヒ・フレーベルや、彼の甥であるユリウスやカール・フレーベルの政治的、宗教的、学校政治的、教育学的思想にあり、また、自由信仰教団や女性協会といった進歩的団体や進歩的個人とのフレーベルの関係にあるのであり、また、これらの団体や個人によるフレーベルの活動への支持にある。学校政治的には、この幼稚園禁止令は、結局は1854年のシュティールの規定への「前戯」（Vorarbeit）だった。だが、幼稚園禁止令の廃止との関連からとくに分かることは、反動勢力は、フレーベルの活動や見解における矛盾や、個々の彼らにとって徹底的に利用価値があると思えるフレーベルの見解の基本原理を解釈することによって、フレーベルを後に、利用しようとしたことである。このことを理解するには、後の発展と同様に、過去の出来事について調べてみることは必然だ。

とくにフレーベルの模範学校を支援するために、オッティリエ・シュミーダー（Ottilie Schmieder）やカール・ロールバッハ（Carl Rohrbach）によって始められた女性協会の設立は、それが重要なものになるや、なんと政治的関係の認識や判断によって、フレーベルの支援者の間で様々な反応を引き起こした。

様々な書簡でロールバッハは、ベルリンにおける重大な困難について述べた。「女性たちは、規約を広めることや、個々人が表だって活動することには断固反対だというのです。彼女らは以前は違うことを望みましたが、いまや、反動が始動するや、カタツムリの殻に閉じ籠もろうとするのです･･･幾人かは、理想のために違う殻に避難していますが、多くは反動が過ぎ去るのを、ただ見ていようとしているのです。彼女らが、会費だけを支払おうとするとき、私が何度も考えるのは･･･ベルリン人って、変な国民だってこと。薄っぺらで、浅く、簡単に興奮するけど、すぐ醒めてしまう。でも、いまは興奮させることは難しくなりました。政治的には信用できない関係になってしまいましたし、彼女らはいろんなところで民主主義を感じ取っても、何らの思慮もないのです」（1850年４月14日のフレーベル宛書簡）。

ロールバッハは、マーレンホルツが「どこでも名前を出そうとはしませんし、ここでも、呼びかけようともしないのです」と嘆いた。ロールバッハが、「国民新聞」（National-Zeitung）にマリエンタールでの教員養成への参加の勧誘を載せさせようとしたとき、「マーレンホルツは断固として反対しました。というのも、そうしないとそれは党派的な仕事と見なされるか、そう曲解されるからというのです。だから彼女は私に、彼女の責任において、仕事の変更を求めました。だから私は、広告を何ら党派色のないスペネルシュ紙（spenersch Zeitung）に掲載させます。同紙から次第に二紙、つまり「国民新聞」と「新プロイセン」（Neue Preussen）に移していきます。そうすることによって、読者には、私たちの仕事が党派を超えたものであることが分かります。もしくは、教員養成は、あらゆる党派に関わっているとする方がベターでしょう」（1850年４月５日のフレーベル宛書簡）。

ディースターベークも、政治的な理由から控えめな態度を推薦し、それに従った。彼は、マーレンホルツの活躍を、フレーベルの仕事に対する「真の献身」として評価したが、次のように補足した。

私は、たしかに今日の進捗状況にここで合意したと宣言することが出来ませんでしたが、少なくとも、私は幼稚園のための女性協会設立に直接的に協力することは拒否せざるを得ませんでした。というのも、私たちは今はペスタロッチ基金を優先しており、それからまた、私の名前を出すことで、仕事が党派性の仕事に見えてしまうからなのです･･･私は職責から逃げることはしませんが、仕事が決定的に求めることだけをします。(1850年３月28日のディースターベークからフレーベル宛書簡)

この書簡では、反動の攻撃に関連して、マーレンホルツの公的な登場にあたって、次のように述べられている。「ベルリン人は、厚顔無恥な連中です。だから、私は新聞で登場することの全てに反対しています。匿名でも疑われるのです―仕事にとって有害なのです。私は堅実な方法のみに賛成します」。

ベルリンでは例え、原則上のもしくは戦術上の関係の見地から、自由信仰教団との結びつきが、表面上は何らの関係もなく演じられたとしても、はたまたロールバッハが―おそらくフレーベルに示唆されて―ロンゲとの接触を試みたとしても、この点で、ザクセンでは全く違って見えた。ブルーム（Blum)、ヴィガード（Wigard)、ケル（Kell)、ルイーゼ・オットー（Louise Otto)、ヘルツ（Herz)、ロースメスラー（Rossmaessler)、レセルフ（Lecerf）のような自由信仰教団のリーダーたちは、民主的運動の頂点に立ちながら、バルツアー（Baltzer)、ヴィスレセヌス（Wislecenus)、ウーリヒ（Uhlich)、ドゥエー（Douai）のような非ザクセン人で自由信仰教団の支持者のリーダーたちと、ザクセンの自由信仰教団設立に参加した。彼らはみんな、フレーベルと結びついており、幼稚園の設立を主導するか、すくなくとも支持した。「･･･ドレスデンでは、自由信仰教団は、お役所で大変悪く扱われているので、全ての幼稚園の責任者、とくに教師たちは、自らの事業を邪魔されたくないときには、自由信仰教団との結びつきを表面化させてはならないのです」と、1850年４月20日に、シュミーダーはフレーベルに宛てて書いた。

彼女は、だからこそ、ドレスデンの女性協会を、ザクセン以外の女性協会や自由信仰教団の個々人と結びつかせようとした。彼女は例えば、ニュールンベルク女性協会との接触を試みた。この協会はたぶん、以下の内容から分かるように、ロンゲによって設置された三つの郡連盟(Kreisverbend)の一つの頂点に立っていた。シュミーダーの書簡の内容が示すことは、いかに彼女が、巧みな妥協を通じて、フレーベルの模範学校を支えるために設立された協会と、自由信仰教団の女性協会を結びつけようとしたかである。そこには次のように書いてある。

昨日、私はニュールンベルクの女性協会からの返書をもらいました。そこには、私の手紙が彼女らを非常に感激させたこと、そしてあらためて、フリードリヒ・フレーベルの方法でまさしく子どもの教育に当たろうとする彼女らの努力が強められたと書かれています。彼女らは、早急に私たちが一つの協会に結集することを望んでおり、私に彼女らの規約や、彼女らの郡連盟（Kreis）から生じた全ての出版物を送ってくれます。郡連盟はそう、ハンブルクと同様に、自由信仰教団の女性協会に属しています。さて、この提案通りに、私たちがこの女性協会と結びつこうとすると、私たちは、私たちの主目的である「マリエンタール」を副目的にしてしまうでしょう。そしてまた、私たちの協会を現在支えているメンバーの多くを失うでしょう。というのも、彼らはちょうど自由信仰教団に歩み寄ることを憚るでしょうから･･･さて、私の提案は、バイエルンやオーストリアの協会と共同代表であるニュールンベルクの協会の協会員に、ちょうど、個人として我がマリエンタール協会に入会してもらおうということなのです。そしてこのことは、たぶん、エーラース(Ehlers)夫人が、ハンブルクの自由信仰教団の女性のなかで話すことができるでしょう。(1850年４月20日のシュミーダーからのフレーベル宛書簡)

マグデブルクで幼稚園を設置しようとヘルツの下で働いているある「女性」を通して、シュミーダーは、当地の自由信仰教団のリーダーであるレーベレヒト・ウーリッヒ（Leberecht Uhlich）にも規約を送った。非常に感激してシュミーダーは、他のところで、ドレスデンの児童保護施設の女性施設長について述べた。「彼女は、以前はあなたの方法に反対する貴族主義的な影響を真に受けていましたが」(1850年３月27日のシュミーダーからフレーベル宛の書簡)、いまでは、全力で模範学校を支持するために活動したいとのこと。こころを込めて彼女は、ヘルツの門下生の力になってあげた。その門下生の兄弟は、「昨年の革命に、ここドレスデンで参加し、ここで捕らえられている」。そしてまた、とくにヘルツ夫人の力にもなってあげた。彼女は、幼稚園の「最高責任者」になろうとしていた。たとえブレイマンが、もう1849年の１月に、「王妃が、まだまだ暴徒が育てられているのに、ほとんど統制できていないのは残念だと言っているにちがいありません」と、彼女の母親に書き送っているような状態であってもだ。1849年５月蜂起の挫折後、ヘルツは様々な嫌がらせにあった。

シュミーダーは、ニュールンベルクの自由信仰教団に属している女性協会との共同に関する自らの提案との関係において、ある重要な事実に注意を促した。つまり、「フォン・マーレンホルツ夫人を、そもそもベルリン人は、

協会に関する一般的な興味を生み出すために、信者と一緒にがっちりと協会の頂点に置くってことをしなかったということです」(1850年４月25日のフレーベル宛書簡)。ロールバッハは、1850年４月５日に、フレーベルに宛てて書いた。

> 協会には、マリア教会の説教師リスコ（Lisco）と、そのDr. リスコの息子がいます（親は熱心に信仰を追い求めていますが、息子は無神論との評判です)。私は一時的に前に立ちます･･･リスコは、まじめで健康で明るい性格で、非常に私たちの仕事に感激して、多くの結びつきをもっています。彼の妻はネアンダー（Neander）監督（Bischof）の娘です。

1850年５月３日に、ロールバッハはフレーベルに伝えた。「協会はここでは16名のメンバーです。男性の幹部は、説教師リスコ、ミューラーと私。女性の幹部は、フォン・ヒンケルデイ（Hinkeldey）警察署長夫人、パイファー（姉）嬢、そしてギュースフェルト（Guessfeldt）市参議会員夫人です」。シュミーダーは、当初は非常に活発に活動していたクノーベルスドルフ（Knobelsdorff）夫人について、その夫が「厳格な貴族」であり、「幼稚園教師たちになおリベラルな傾向があること」を危惧していることから、夫人が自制していることを指摘した。

だからベルリンでは、断固とした反動勢力（Hinkeldy!）からもリーダーが出ていたのに対して、ドレスデンでは、信頼のおけるフレーベルの協力者（アドルフ・フランケンベルクAdolph Frankenberg、Dr. ブルーノ・マールクヴァルトBruno Marquart、オッティリエ・シュミーダー）と並んで、著名な民主主義者や自由信仰教団のメンバー（ヘルツ、レセルフLecerf）の夫人たちがいた。

またハンブルクへ、シュミーダーは協会の呼びかけや規約を送ったが、その際に彼女は、とりわけ当時、当地で活躍中のフレーベルに、リュトケン（Lütken）夫人やほかの人たちを協会に入会させるように依頼した。ディースターベークは、彼とハンブルク女性協会との間にあった言及した論争にもかかわらず、フレーベルの活動と当地の幼稚園に関する自己認識を基に1850年５月に書き、1851年はじめにやっと公刊した論考「ハンブルクにおける女性教育協会（Frauen-Bildungsverein）」でもって、「女子専門学校」について詳細に述べ、フレーベルの課題に積極的に参加していると述べている。彼が、次の両者は女性協会によって目の目を見ると示唆したのは全く正しい。「･･･一時的には、フリードリヒ・フレーベルの直接的な活動であり、永続的には、カール・フレーベルの活動すなわち専門学校（大学）である」。だが、一時的だったのは、フリードリヒ・フレーベルの活動だけではなく、カール・フレーベルとその専門学校の活動だった。政治的、宗教的、教育的な関係性を正確に観察すると、この事実はすでに、幼稚園禁止令の前哨戦となるものであった。

カール・フレーベルは1875年に過去を次のように振り返って書いた。

> 1849年に私の妻がチューリッヒの私の私学校（Privatschule）の近くに素敵な幼稚園を持ってました。フレーベルの最良の弟子の一人で、最も利口な幼稚園教師の一人、アマーリエ・クリューガー嬢が園長でした―この素敵でやりがいのある活動仲間から、当時のドイツ変化と希望が私たちを駆り立て、私たちに呼びかけたのです。

カール・フレーベルとヨハンナ・フレーベルは、私たちが知っているように、ハンブルクで女子高等専門学校（大学）計画を実現させるという希望をもっていた。女子大学はスイスでは実現されていなかったので。だが、カール・フレーベルの施設（私学校）は、チューリッヒでは進歩的な教育の中心だっただけでなく、1848/49年革命の敗北後、とくにバーデン蜂起後は、ドイツの民主主義者とくに教師たちの避難所になっていた。ヴィルヘルム・リープクネヒトは、フレーベルの模範学校について以下のように報告した。

> 違うところで私はすでに述べたが、私はマールブルクの地が私にとって非常にやばいところになったので、チューリッヒのフレーベルの模範学校で教職に就いた。それは1847年秋だった･･･その学校は当時はまだ日が浅かったが、あの著名なユリウス・フレーベルの弟であるカール（Carl）・フレーベルは･･･優秀な教育者で、チューリンゲンの出自で、幼稚園の設立者フリードリヒ・フレーベルの甥っ子であった。教育能力は血筋だろう。まだ日にちが浅いのにもかかわらず学校は、もう、卓抜した名声をとくに英国においても享受していた。英国でカール・フレーベルは、数年間家庭教師をしており、多くの仲間たちの間で知れ渡っていた。（W・リープクネヒト「私の学校親方時代」(1901)）

不断に個性を尊重するなかで「子どもを人間へと教育することは、根本だった。それに基づいてフレーベルは、メッテルニッヒの反動期に再び脇に追いやられた、かのほとんど忘れ去られたペスタロッチの教育法を、広く発達した科学に依拠しながら、自らの学校を運営した。私が学生時代に培った―多くは周囲とのあつい闘いのなかで―教育の理想は、ここで、私は実現されているのを見た。いや、その実現のために私の能力を提供できるはじめてのチャンスをえた（同上)。

ベルン、ゲンフ（Genf）と並んでチューリッヒは、

反動によって迫害された連中の中心地であり、「芸術家、学者、ジャーナリスト、教師の集合地」となった･･･その際、彼らは見かけ上、カール・フレーベルの学校に引き込まれたように感じた。「逃亡者は逃げ込んできては逃げ出していきます。チェチェは、そんな彼らのなかにいますが、彼は我々を熱心に訪ねてきます･･･彼は再びナイスな人になってます」とアマリエ・クリューガーは1849年８月６日にフレーベル宛てに書簡を出した。

さて、もう一度ヴィルヘルム・リープクネヒトについて。彼は、自分の学級では21人の子どもを教えたと述べた。「そのなかには、特別な配慮を頼まれたユリウス・フレーベルの息子がいた」。彼はユリウス夫人に非常に魅せられた。「というのも、彼女は若き革命の潮流に感激しており、その潮流の多くの代表者と個人的に知り合っていたからである」。その結果彼は、「彼女とすぐさま非常に活動的で好ましい交際」を結んだ。彼女との交流によって彼は、「自らの立場の様々な困難を乗り越え、郷愁に打ち勝った」。クリューガーはフレーベルに伝えた。「ユリウス・フレーベル夫人は、ここでも、私は毎日一時間は話しますが、彼女はあなたの活躍に熱心な興味をもっており、おそらく次の養成講座には参加するでしょう」（フレーベル宛て1849年８月６日付書簡）。

ユリウス・フレーベル自身も、1849年にアメリカに移民する前は、まだチューリッヒにいた。彼は、アメリカで妻が死んだ時に、彼と親しかったマルヴィーダ・フォン・メイセンブーク（Malvida von Meysenbug）に、アメリカに来て妻になってくれるように頼んだ。メイセンブークは、ドレスデン蜂起の際には、「夫人の誓い」の論説をかかげて、女性たちに、「虐殺された自由のために復讐しよう」、だって私たちは「自由な世代を育て上げる」ことが出来るのだからと呼びかけた。このメイセンブークは、ハンブルクの「女子高等専門学校」の設立を、政治的な理由と、経済的な理由から受け入れた。彼女は備忘録に次のように記した。

> 海を渡る方法が見つかったように思えた。まず、この高等専門学校に行って、そこからアメリカに行くことを決めた。私にこのような手段を示すために、全てが折り重なったように思えた。夫人と一緒に、この学校の校長に招かれた教授（カール・フレーベル）は、アメリカで私を待っていると言及した友の弟だった。（メイセンブーク「ある理想家の備忘録（1899）」）。

メイセンブークは、1850年10月から1852年４月まで、この高等専門学校で、ほんのわずかの間だが学び、カールやヨハンナ・フレーベルと同じように、ハンブルクの自由信仰教団員となった。それから、カール・フレーベルとビュステンフェルトの勧めでヨハンナ・フレーベルとともに、学生寮の「寮長」（innere Leitung）を引き受けた。そこで彼女は、二三の改善を取り入れた。それは、若い女性たちの自治と、高度な自立を目指すものであり、マルヴィーダやヨハンナが最も大切にしていたものだった。当地の自由信仰教団で、男女が共に授業を受けるものとされた無宗派の村落学校（Gemeinde Schule）を作ろうとする計画が出たとき、メイセンブークは、当該の学校委員会の議長に選ばれた。この学校ではテオドール・カール・ゴットリープ・ヒールシャー（Thodor Karl Gottlib Hielscher）も授業を行った。彼は、ベルリン師範学校でディースターベークの教え子であり、フレーベルの『週報』（Wochenschrift）の共同者であり、女性協会の学校でその禁止令から解除までの教師だった。この学校の計画についておそらくヴァンダーは聞いていたのだろう。彼は次のように記した。

> 「女子高等専門学校」の予科となるハンブルクで設置しているという女子学校（Töchterschule）で、教職の口にありつけるかもしれないというので、私はすぐさま当地を目指して旅立った･･･だが、ハンブルクでのこの学校の設立はまだ先ということなので、私は当地での滞在をほんの僅かで切り上げた。私は次にブレーメンに旅立った･･･

1851年にはもう、高等専門学校は危機に瀕した。「敬虔主義者」に対するブレイマンやクリューガーの警告は徹底的に正しかった。メイセンブークは次のように述べた。カール･フレーベル（?）が南ドイツへの旅の途上で、「陰謀の手がかり」をつかんだ。「その陰謀とは、ハンブルクで強力な組織だった敬虔主義者党が、高等専門学校に対する反対行動をはじめるというものだった。彼はさらに、シュバルツバルトの小さな村にまで、聖職者のところで刊行されたパンフレットを見つけ出したが、それはハンブルクの敬虔主義者の印刷所に由来するもので、そこでは高等専門学校は煽動者の火元として描かれており、同校では、学問を装いながら革命の計画が練られており、それ故、両親は娘にこの学校を信用させてはならないと警告していた」（メイセンブーク「ある理想家の備忘録」（1899）」）。

この高等専門学校では、自由信仰教団と同様に一層強まった民主的傾向が徹底したことを見落としてはならない。だがそれは、専門学校への寄付者の意味においてではないことは疑いない。

「町の寄付者の一部は、次第に学校に対して冷たくなった。それは、脅しに弱く、噂話にびくびくする薄弱な性格によるものだ。自由信仰教団との親密な結びつきは、クソ坊主ども（彼らは、教区学校（Gemeindesaal）にくる聴衆を数えることができないぐらい、自らの教会に閑古鳥が鳴いていることで怒り狂っていた）に、学校を

攻撃し、神との断絶を公にされることを欲しない人々から、学校に対する共感を引き離す口実を与えた」とメイセンブークは述べた（「ある理想家の防備録」）。

このような攻撃の最初の犠牲者が、カール・フレーベルとその妻ヨハンナだった。1851年４月19日、ハンブルクからシュミーダーがフレーベルに宛てて書いた。

> ３月１日に、私はハンブルクに着きました。私は、ここで伝言を受け取りました。そこには、カール・フレーベルが専門学校を辞めたとあり、女性たちが即座に私と関係を結んで、とくにゴールドシュミットが、私が筆頭理事に就任することを望んでいるとありました。

だがシュミーダーは断った。というのも彼女は、学校を外的には「穏健な装い」をもたせながら、内的には旧来のかたちを続けさせるといった「マスク」を被ることを欲しなかったから。彼女は、1848年には民主的教員運動の頂点にいたProf.Dr.グスターフ・フェルディナント・タウロウ（Gustav Ferdinand Thaulow）との度重なる会談の後に、キールに向かい、当地で市民幼稚園の園長を引き受け、そしてそれ以外に女子学校と接続した私立幼稚園を開園した。ベルリンから1851年５月15日に、ディースターベークがフレーベルに宛てた書簡が興味深い。そこには、とくに次のように書いてある。

> 君の甥っ子カール・フレーベルは、専門学校を辞しました。私はエルベで彼に会いました。彼は家庭教師の口を探しています。私はハンブルクでは彼の将来を危惧します。みんなは、私に専門学校の学長（Rektor）になれと言います。
> 自由信仰教団は、この学校のせいで大変な軋轢のなかにいます。民主的なシステムがこの学校に導入されました。私は当然、大きな混乱のなかでこの学校をみます。私は校長（Direktor）もしくは学校が駄目になると思います。
> みんなは、私に校長になれと言います。
> でも、どれも私の個人的関係にはふさわしくありません。私はブレスラウのショルツ（Scholz）に提案して、親切に説明しました。彼が引き受けたとしても、ハンブルクにいるカール・フレーベルの代役を数ヶ月務めるなんてことは、とても出来ませんと。学校や自由信仰教団を維持したい気持ちは、実際、私にあります。
> 今日、ショルツから、希望しないとする手紙が来ています。さて、どうしましょう。

エミーリエ・ヴュステンフェルトとマルフィーダ・フォン・メイセンブークは、「相互に長い悲劇的な助言を」行った。「私たちの原則を大きく公的に知らせたことが、あまりにラジカル過ぎたと非難されました。でも私たちは、私たちが欲したことを明確に述べたことを後悔していません」（「ある理想家の防備録」）。

メイセンブークはまた、同書で次のように述べた。「私たちは、専門学校を維持することは不可能になるだろうことは理解していました。私たちは何らの譲歩も欲しませんし、助けも乞いません。なぜなら、援助を得るためには嘘をつかなくてはならなかったからです。だから、私たちは自由意思で閉鎖することを決定しました」。

反動勢力は、カール・フレーベルのみならず、フリードリヒ・フレーベルの労作（Sache）であり、女性運動並びに自由信仰教団の労作でもあれば、そもそも小市民民主主義運動の労作である施設を破壊することに成功した。

カールとヨハンナ・フレーベル夫妻は、スコットランドに移住した。カールは、当地のエジンバラで教師・教育者として活動し、彼の妻は女子学校を設立した。彼らのチューリッヒの学校は、元プロイセンの大尉フリードリヒ・フォン・ボイスト（Beust）が引き継いだ。彼は、1848年に様々な民衆蜂起に参加し、1849年にはバーデン・プファルツの蜂起の軍事的リーダーの一人だった。彼は―エドゥアルド・バーンシュタインによると―「本人出廷拒否のままで三度死刑判決を受けた。彼は亡命者として、チューリッヒで長い間教師としてフレーベルによって設立された学校で活動した。そして、この学校を･･･引き受けて、学校ではフレーベルの直感教授のシステムを一層発展させた。その結果、学校は広く外国でも知られ、しばしば外国人による訪問を受けた。ボイストは―貴族の称号を拒否した―フリードリヒ・エンゲルスの従姉妹である彼の妻と学校で一緒に働いた･･･ボイスト夫妻は、ちゃんとした社会主義者を教師として自分たちの学校に雇用したことによって、私たちチューリッヒの活発なドイツ社会主義者の面倒を見てくれた」（バーンシュタイン「口上手なドイツ人たち」1879）。

ボイストは、第１インターナショナルのメンバーとなった。

ハンブルク女性協会のリーダーの一人ベルタ・トラウン（Berta Traun）は、離婚後ヨハネス・ロンゲ（Johannes Ronge）と結婚し、彼と一緒にロンドンへ行った。ディースターベークは彼女について次のように書いた。彼女は「知的に才能に溢れた女性」であった。彼女は、1851年にロンドンに幼稚園を設立したが、「幼稚園の基本原理について広く講演」を行い、「自著となる『イギリス幼稚園実践入門』（1855年ロンドン･･･）によって、広範な読者に」影響を及ぼした（ディースターベーク『ドイツ、イギリス、フランスのフリードリッヒ・フレーベル』1879）。彼女はその時、チャールズ・ディケンズによって支持されたが、彼が彼女の著書を論評したことによっ

て、その著書は何度も再版された（1884年に15版）。カール・マルクスは、1855年11月８日に、モーリッツ・エルスナー（Moritz Elsner）に手紙を書いた。「ロンゲは、ロンドンで夫人一緒に幼稚園を経営しています」。テオドール・フォンターネ（Theodor Fontane）の息子も、1857年にこの幼稚園を訪問した。

ベルタ・ロンゲの妹で、専門学校の最初の生徒の一人マルガレータ（Margaretha）は、その夫でバーデン・プファルツの国民軍では将校として戦ったカール・シュルツ（Carl Schurz）と1852年にアメリカに亡命した。シュルツは、ラスタット要塞からの冒険的脱出に成功し、また彼の教師であるゴットフリード・キンケル（Gottfried Kinkel）のスパンダウ刑務所からの冒険的救出にも成功した。シュルツはアブラハム・リンカーンの親友となり、最も著名なドイツ系アメリカ人の小市民民主主義者の一人となった。シュルツ夫妻は、差しあたり、水の町ウイスコンシンのある農場に定住した。ここで同年にマルガレータは、「ハンブルクのフレーベルとフレーベル幼稚園に親しむことによって、彼女自身、理論的にも実践的にも精通して」、移民したドイツ人のなかでアメリカで最初の幼稚園を設立した。

マルフィーダ・フォン・メイセンブークも、1852年には亡命しなくてはならなかったが、まずは差しあたり、とくに「理論的な仕事を始めるために」ベルリンに行った。彼女はハンブルク、イギリス、アメリカの民主的な友人たちと文通して、「教育や相互の支え合い、真の団結を目標」に結びつこうとしていた民主的ジャーナリストや労働者を迎え入れた。家宅捜査や尋問によって彼女は―彼女の兄弟による密告で―反動的警察によって、国家に敵対する活動を行ったとしてベルリンから追放された。「防備録」に彼女は次のように書いた。

> 幼稚園の教師たちが、幼い子どもたちに自由や自立の芽を据えようとしていることが明白となった文書が役所にあるんだという口実で、幼稚園が告発されることが確実に思われるような状況下で、いったい何をはじめることが出来たというのでしょう。このことは、私のいる前で、役所に勤めていた男性、彼とは偶然一度会ったことがありましたが、その彼から言葉に出して言われたことなのです。

カール・フレーベルは1875年に回顧しながら次のように述べた。「当時、プロイセン王国のラウマー大臣は、ちょうど1852年に私をハンブルクと、その他のプロイセンの影響下にあるドイツから追放した」。こう述べることによって彼は、進歩的教育者を弾圧しようとした、そうでない場合は絶滅させようとさえした反動の代表者の一人を名指しした。このような弾圧は、フリードリッヒ・フレーベルや彼の親族、彼の友人そして彼の主仕事、幼稚園にも当てはまった。

ここでもう一度、1848年と1849年に戻らねばならない。「ささやかな活動」の禁止は、すなわち1848年の夏にはもう浮上していた。ヘンリエッテ・ブレイマンは1848年６月28日に日記帳に次のように書いた。

> 昨日、オッティーリエ・ベーリング（Ottilie Baehring）が非常に不愉快な報告をもってやってきた。おじは、ちょうどルードルシュタットの保育所で教育的な子ども遊びを導入しようとしており、ルイーゼ・レヴィンがそこで働いていた。みんなはそのことに賛成したが、なんと侯爵夫人の母が拒否した。

教員集会の14日前、フレーベルにシュバルツブルク政庁の司法局から1848年８月２日付けの召喚状が来た。その内容は、フレーベルに対する「友好的な感情」を推し量らせるものでは全くなかった。そこにはこうあった。「あなたは、８月15日に公国政庁の司法局に本人自ら早々に来て、ある講演をする予定であることについて申し開きをするために召喚されました」。確実に、この「講演」は、その内容については確かに今日まで知られていないが、少なくない民主主義志向の教育者が参加を申し込んで開催されることが確実な集会と関係していた。

集会後―つまり1848年８月24日と1849年６月12日の間に―この集会の準備と実施でフレーベルの最も親密な協力者だったシュタンゲンベルガー（Stangenberger）からのフレーベルへの書簡が途絶えている。シュタンゲンベルガーはこの間、投獄されていたのであり、どうやら1849年５月23日の恩赦令によってはじめて再び自由の身になったのである。

フレーベルがドレスデンで、いかに幼稚園や幼稚園女教師養成が、発達に即して教育する人間教育という彼のヒューマニスティックで民主的な見解の精神で広まったかを、感激して語れたとしても理由無きことではなかったが、ちょうどその時、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム４世は、革命期に現れた進歩的で学校政治的な教育観の全てや、その見解を表明する教育者全ての迫害への「スタート合図」を切った。1849年１月15日から29日まで開催された師範学校長や師範学校教員の会議の開始演説で、フリードリヒ・ヴィルヘルム４世は、とくに次のように述べた。

> 昨年プロイセンを襲った不幸の全ては、汝たち、ひたすら汝たちの責任である。民衆に無宗教という知恵を与えた間違った教育の責任。それを汝たちは真の知恵として広めたではないか。そうすることによって汝たちは、私の臣下の心情から信仰と忠誠を根絶やしにし、彼らのこころを私から去らせたのだ。このような虚偽でみせかけの教育を、私はすでに皇

太子の頃からこころの奥底から憎んでいたし、君主としては、このような教育を潰すために全力を尽くした。私は、何ら迷うことなく、当たり前の道を進むであろう。この世のいかなる力も、私をそこからそらすことは出来ないだろう･･･賤民を私は恐れないが、今様の不埒な世界観をもつ無神論の教師たちが、私を毒し、私が今まで自慢することが可能だった統治機構を駄目にしている。だが、私が支配権を有する限り、私はこのような間違いを正すことができるだろう。

これはあからさまに宣言されたが、その結果が示したように、師範学校の幹部たちにのみ向けられたものではなかった。最初は、フレーベルと彼の主な仕事である幼稚園は、まだ迫害されなかった。ドレスデンの養成コースの後、フレーベルはまだ1849年にこのようなコースをリーベンシュタインではじめた。それから、ハンブルクでの彼の上首尾な活躍があり、彼のこのような仕事を支える女性協会の活動があった。ハンブルクで彼は、ブレスラウからアマーリエ・ヘルド（Amalie Held）の書簡を受け取った。そこには、ブレスラウの女性協会が幼稚園を設置しようとしているとあった。この幼稚園は、彼の弟子であるマリエ・チュルン（Marie Zuern）が引き受けた。マリエンタールでフレーベルは、1850年に最終的には、組織的な幼稚園女教員養成をはじることが出来たので、彼のアルテンシュタインでの大幼稚園祭が実施されている。彼の養成コースで訓練された人たちは、あちらこちらで幼稚園を引き受けたり、建てたりした。ベルリンでも、1851年８月３日に、最初の幼稚園が開園したが、それはなんと、ディースターベークが開設の演説をしたパンコウ（Pankow）のペスタロッチ財団によってである。

だが、ドレスデンの５月蜂起が制圧され、バーデンやプファルツの革命勢力が敗北した後の1849年夏には、小市民民主主義者のリーダーへの追及が始まった。その中には少なくないフレーベルの友人たちがいた。チェチェ、ケヒリーや、多くの教師たちがスイスへ逃げることができた。Dr. ハインリッヒ・ヘルツと彼の家族のラウジッツへの逃避を、アマーリエ・クリューガーは、フレーベルの希望で彼に、1949年５月19日の手紙で詳細に伝えた。その前日に、ヘルツはすでにフレーベルに将来を予見しながら書いた。

私の妻は、自分の幼稚園を大変心配しています。幼稚園に対する政府の承認は、ほとんど問題にならないでしょう。ただコストなのです。つまりこの関わりのある学校を独力で支えるコストを支払うことが、私たちには不可能になるでしょう。というのも、私の収入も現在、非常に危機的な状態あるからです。

ヘルツは最初、終身刑の判決を受けたが、最後には特赦で10年刑に減刑された。拘留中、彼はフレーベルに関する仕事をし、彼の妻が面会にきたときに、彼女に自らの仕事の成果について筆記させた。

「ヒルデンハーゲンの顔は非常にすぐれません」とアーマリエ・クリューガーはチューリッヒから1949年８月６日にフレーベルに書いた。「彼の二人の先生を受け入れましたが･･･近い将来、どうなるかが分からないのです。彼も、最後には逃避しなくてはなりません。そしてスイスに行くことは確実でしょう」。とくに、1849年９月８日と、1851年５月５日のフレーベル宛ての二つに書簡でヒルデンハーゲンは自らの迫害について述べた。

「目下のところ、我が民族はコンスタンチヌス帝にならった秩序と忠誠という屋号のなかにいます」と、この失意のなかの民主主義者は最初の手紙に書いて、こう続けた。「この大元帥様は、ひたすら従順しか、盲目的従順しか知りません！　従順を誓うことは、私に多くの苦痛をもたらしますが、罰せられることは、より一層の苦痛をもたらすのです！　そう。国王が行っていることは間違いのないことだということが、我々のへんてこな立憲主義のスローガンとなってます！　お上に逆らうことは罪なんです！　政府に反対する教師は全て、すぐさま懲戒にさらされるのです」。

この手紙で彼はフレーベルに、クエッツ（Quetz）の幼稚園の維持がもはや不可能になることも伝えた･･･「私はもはや、家族のために自分でパンを得ることもないでしょう･･･私は懲役になっているのと同じなのです」。二番目の書簡でヒルデンハーゲンは、フレーベルの甥っ子カールやブレイマンが言っていたように、フレーベルの強情な、従属関係を求める態度を批判しながら、自らの迫害について述べた。

ただ一つのことだけが、私を悲しませます。君が、君の手紙で本当にそっけなく述べていることです。「君は、僕が聞くところによると、幼稚園をあきらめたんだって」と。だから私が、いまの時代にとっては不都合であるような素敵な理想を実現させるための闘いにおいて敗北しなければならなかったことは、君にとっては何ら同情の言葉はないっていうのかい？ ･･･私は、幼稚園をあきらめてはいません。たとえ、私がQuetzに設立した幼稚園が、今現在、もはや存在しないとしても。私は、幼稚園を維持し続けることが不可能になりました。というのも、当局が私から全ての財産を奪ってしまったからです。被告席から被告席へと引きづり回され、それでも敵

によって選ばれた陪審員による裁判で無罪となりましたが、ついには体制の犠牲者になったのです。収入は半分以上取り上げられ、告訴は最高潮に無意味で嘘だらけであり、腹立たしくておぞましい非難から自分を弁護するために、心身がぼろぼろになってしまいました。私の学校も潰れてしまったのです。私は一年間、当局によって多くの教師を奪われました･･･とうとう私は告訴されている間は、授業することも禁じられてしまいました。さて私が、もう疲れてしまって、私の人生の夢を追いかけずに、学校や幼稚園を断念してしまった際―こいつら当局は私に次のように質問しました。どうしてこうなったのかい？　君らには、何らの禁止令も発せられてないじゃないか?!　そして古い友人たちは、冷淡に書いてきます。「君は、僕が聞くところによると、幼稚園をあきらめたんだって」。私はこの言葉に対しては、私は君の理想を捨ててはいないと断言する以外の何ものもを持ち合わせません･･･それが証拠に、私は裁判費用と日々の糧を得るために、私の書斎の価値あるものの多くをすでに売り払ってしまわねばなりませんでしたが、君の本だけは全て、まだ所有しているのですよ。

ヒルデンハーゲンは、最初の手紙では、逃避という考えを恥ずべきものとして拒絶したが、二番目の手紙では、あきらめと同時に楽天的なことを述べた。

懲戒局が、私を解き放ってくれるのなら、私は海の向こうで私自身の外的で内的な人生を探します。ニューオーリンズでは、私の指導の下、フレーベル主義幼稚園が誕生するでしょう。

他のフレーベル信奉者、協力者、弟子たちについて、彼らが亡命したことは知られている。例えば、ミッデンドルフは1849年８月21日にフレーベルに宛てて、二人のベルリンでのバリケード戦士である、スイス人でカイルハウ教師ツェラー（Zeller）と、フレーベルの弟子ヴィルヘルム･ベーリンガー（Wilhelm Baehringer）が、「幸運にも、新世界に到着した」と述べた･･･。２年の禁固刑が下されたヴィスレセヌス（Wislecenus）は、アメリカ亡命に成功した。ベンフェイ（Benfey）は、バイルホッファー（Bayrhoffer）教授と、彼の下で働いていたテオドール･ペーシェ（Theodor Poesche）について報告した。

バイルホッファーを私は、まだ秋にカッセルで見かけたはずだが。彼は、革命を導く独立委員会のリーダーだった。テオドール・ペーシェと私は、今のところまだ再会していません。彼は1851年にアメリカに渡り、そこへバイルホッファーが1853年に彼に続きました･･･（ベンフェイ『回想のフレーベル』1880年）。

テオドール・ペーシェについて、彼の弟であるヘルマンが、ハノーファーからフレーベルに宛てて1851年３月17日に次のように述べた。「私の長兄は･･･この自由信仰教団の原則のせいで･･･もっとも素早く逃げたが、判決は厳しかった（14年間の禁固刑、14年間の警察による監視、将校から兵卒への降格）」。自由信仰教団の他のリーダーであるブレーメンのルドルフ･ドゥーロン（Rudolph Dulon）牧師も、ニューヨークへの亡命に成功した。その他の迫害については、他の箇所で述べられているが、幼稚園禁止令に関連することは、再び言及されるであろう。

エドゥアルド・バルツァー（Eduard Baltzer）。彼は1847年にノルドハウゼンで自由信仰教団を立ち上げたが、そこは、数年間は自由信仰教団協会の「中心地」と見なされていたが、その彼もすでに早い時期から迫害を受けていた。1848年に彼は準備議会の議員となって、それからプロイセン国民議会の議員となり、そこで彼は「左翼」に位置して、ヴァルデックの憲法草案にかかわった。また、ヒルデンハーゲンによって学校委員会の助言者となった。1848年の８月にはもう、彼は政治的な演説の最中に、扇動された群衆によって襲われ、その結果、それ以降の生涯にわたって苦しまなければならなかった。後には、家宅捜査と訴訟が続いたが、もちろん無罪という結末だった。ノルドハウゼンは、プロイセン幼稚園禁令の出発点となるということだ。

バルツァーは、1851年１月28日に、41人の子どもがいる幼稚園の開設と、招聘されたシュトルヒ（Storch）博士の夫人や、フレーベルの弟子であるエミー・ヴォルフガング（Emmi Wolfgang）の園長としての起用についてフレーベルに報告した。バルツァーは、雑誌「自由信仰教団会堂（ホール）」第一号（1851年１月28日、ノルドハウゼン）に献呈の辞を添えたが、その第一面では開設された幼稚園について、他面ではフレーベルについて紹介がなされた。バルツァーは、この手紙で、自由信仰教団の親会が幼稚園を設立したことを強調した―幼稚園は、万人が立ち入ることが出来る「神殿」（Tempel）なのだ。「だから、ユダヤ教徒もキリスト教徒も、我々自由なキリスト教徒に関心をもち、彼らの子どもを送り届けたのだ･･･」。バルツァーは病気になったので、ベンフェイが彼を訪ねてくれたこと、幼稚園の「開所式」を手伝ってくれたことを喜んだ。だが、ベンフェイにおいては、何かが違った！　彼は禁令にもかかわらずノルドハウゼンに留まり、「偽名」で演説して幼稚園を開設した。ドイツカトリック教団のロンゲのように、バルツァーも「幼稚園を万人に、とくに自由信仰教団」に推薦した。「自由信仰教団会堂」第一号の論説「フリードリヒ・フレー

ベルと幼稚園」は、「禁令の設定」はフレーベルにとっても、彼の信奉者にとっても、敵対者にとっても重大なことであるというセンテンスで始まった。

> 人は、しょっちゅうフリードリヒ・フレーベルと、カールやユリウス・フレーベルを混同する。これらの人たちを混同することで、非常にしばしば概念の混乱や、幼稚園に対する誤った判断が生じる。このことを釈明しようとすると、次の表現が役立つ。ユリウスとカールは、フリードリヒ・フレーベルの早くに亡くなった兄の息子たちであると。

6月にはまだヘルマン・ペーシェ（Hermann Poesche）が非常に感激して次のように書いた。

> 幼稚園は、ここでは実際、とてもりっぱに存在しています･･･ノルドハウゼンの子どもの世界では、完全な革命が最も広範な民主的基盤の上で起こりました。全ての学校の子どもたちが、文字通りの憤激をもって、彼らの役割を演じました。プロレタリアートでさえあっても･･･子どもたちは、ユダヤ人が救済を切望したように、自然な粗暴さからの救済を切望します。（1851年6月3日のノルドハウゼンのペーシェからフレーベルへの書簡）。

この月の終わりに、フレーベルはバルツァーから以下の連絡を得た。

> 私たちの幼稚園は、不断に成長していますが、目下のところ、政府によって解散されました。理由は、幼稚園女教師は政府の許可証をもたねばならないというものです（それについては、私たちは幼稚園設置にあたって何も聞いてません）。このことは、さて、後で繕われるでしょうし、拒否されないことを望みます。（1851年6月20日のノルドハウゼンのバルツァーからフレーベル宛ての書簡）。

1851年7月末にはまだ幼稚園女教師エミー・ヴォルフガングは、幼稚園の閉鎖は政府によって「手続き上の不備」とみなされたもののみに基づくのであって、彼女の申請はいずれ認可されるだろうと期待していた。また彼女は幼稚園の繁盛に感激して次のように報告した。

> 私たちは、全ての時間を、私たちの施設の繁栄のために非常に活発に参加したことを嬉しく思いました。この施設には、幼稚園は閉鎖されねばなりませんでしたが、目下のところ60から62名の子どもたちがいたのです。（1851年7月28日のノルドハウゼンのヴォルフガングからフレーベル宛ての書簡）。

この間に実際、何が起こったのか？　エアフルト政庁は、1850年12月・1851年1月に関する1851年2月8日の月報で、シュトルヒ博士(!)による幼稚園設置について言及した。1851年3月4日に、フリードリヒ・ヴィルヘルムⅣ世は、宗務・教育・医事局担当相フォン・ラウマーと、内務相フォン・ヴェストファーレンにこの報告書に注目させ、その際に、この幼稚園は、「フレーベルの原理」に基づいたものであることを強調して、以下のように続けた。

> この報告書が伝えるところによれば、政庁はこれを賞賛に値する行為と見なしているように受け取れる。だが私の注意を引くに違いないことは、私の知る限り、幼稚園はフレーベルの社会主義制度の一部分をなしており、子どもたちを無神論や社会主義的原則へと育成することを目論んでいるということだ。それ故私は、あなたたちがこの問題について一層追求することを期待している。

エアフルト政庁は、シュトルヒ博士の人物について報告すること、さらに、幼稚園に対する共感がどれくらい拡がっているか、そして、その他の施設があるのかどうかを報告するように求められた。無神論的、社会主義的傾向に関しては、ここではじめてカール・フレーベルのパンフレット「女子高等専門学校と幼稚園」について言及されたが、同パンフをラウマーはこの間読んでいた。ハルフター（Halfter）が、ラウマー相が「フリードリヒ・フレーベルの名前を、幼稚園の創設者として、ほとんど十把一絡げで」読んだと指摘したことは正しい。それ以外に、このパンフレットにはヨハンナ・フレーベルの論文「幼稚園の社会的意義」もあった。以下のような表現は、カールと同様にフリードリヒ・フレーベルも、反動的勢力にとっては、かなりうさんくさいものに思われたに違いなかった。例えば、パンフレットでは「進歩の政党は･･･ますます社会主義の理想に到達する。社会主義の課題は、端的に言えば、理性的な関係を、自然に、あるいは人工的に強奪された関係に取って代わるものとして特徴付けられる･･･」。さらに「我々のプロレタリアートの境遇」が特徴付けられる。「彼らは、身体的にも精神的にも飢えている最中に、他人のために教育財をただ調達するために働かされているのである」。このパンフレットでは、「いま自立と政治的同権を求めて行われている闘いにおいて」、家庭教師、女教師、奉公人はこの「従属的な立場」をもはや担わないことが確認され、そして、「国民学校の昇格は･･･偉大なる社会的変革によって達成される」に違いないことが指摘された。土台に幼稚園がある統一学校が要求される。このパンフでは、フリードリヒ・フレーベルのシステム—遊びや遊具まで—が、

詳細に強調され、その普及が高等専門学校の中心的課題として特徴付けられる。高等専門学校の計画では、何らの宗教授業が考慮されなかった。これに関する質問に、カール・フレーベルは次のように答えた。

> 相互の結びつきを通して、特別な宗教は昔から大いに権力を亡くしていたし、今や同じ理由からますます止めなければなりません。自然科学や哲学は、近年では特別な宗教をますます要らないものとし、理性的教育は、特別な宗教があらゆる被教育者の精神的成長に占めたであろう役割に取ってかわるでしょう。高等専門学校が軌道に乗るまで、宗教的な世界観が支配すべきですが、それからは、この世界観は哲学的世界観を前に後退しなければなりません。しかも、男子学生と同様に、女子学生においてもです。自分たちの子どもが自分たちの宗派で信仰生活することに価値を置いている両親は、施設外での特別な宗教教育を望むでしょう。だから、そんな宗教教育が起こらないところでは、両親は子弟のなかに、世界に関する最高に理性的な根本理想や、人間に関する理想を育てる責務を持つのです。（パンフレットより）。

でもとにかく、エールフルト政府は態度を決めねばならなかった。1851年５月27日、エールフルト政府はベルリンに、すでに10年以上前に、カイルハウのフレーベルの教育舎が注視されていたと報告した。プロイセンのシュックマン（Schuckmann）相が、「扇動家の巣」として調査を求めていた。この報告によれば、フレーベルの行動は、「早熟な意識、熟慮された行為を呼び起こすと同時に、子どもの無邪気さや、子どもの依存感情を根本的に･･･破壊する」となっていた。バルツァーとさらに一人のユダヤ人をその頂点に据えたノルドハウゼンの幼稚園協会の定款が定めらる。そこで表現される「積極的な宗教の拒否」は、自由信仰教団の目的である。自由信仰教団は、幼稚園やそれにリンクする教団の学校を通して青少年を手中にしようとする。幼稚園は、55名の富裕層の子どもによる登園を得るが、「労働者階級」の子どももいた。その幼稚園は閉鎖された。というのも、シュトルヒ夫人は、ゴータ生まれなので、外国人であり、省庁の判断を受けねばならなかった。また幼稚園も、1839年12月13日の訓令11号による子どもの面倒を見る学校（Kinderwarteschule）としての判断を仰がねばならなかった。ノルドハウゼンのギムナジウムに通ったシュトルヒ博士は、「1848年革命では注目されており、国民集会には何度も現れ、国王陛下に反対する演説をし、厚顔無恥の頂点にいた」。彼がノルドハウゼンに来たとしても、追い返されたであろう。彼の妻と姪っ子は、まだ訴追されるには至らなかったが。同類の他の施設は、存在しなかった。マグデブルクの州長官によっても、このことは、この行政区で確認された。

1851年８月７日の三通によって―国王への報告、エールフルト政庁への通達、全ての政庁への回状―プロイセンにおける幼稚園は禁止された。国王への報告は、ほとんどがエールフルト報告に基づいた。幼稚園の閉鎖は、それ故、「公式の理由」によって生じうるものであったが、次のことが付け加えられた。

> あらゆる積極的な宗教的基礎を子どもの教育から遠ざけるか、全くフレーベルの原理にしたがって無宗教の授業を普及しようとしている施設は、そもそも黙認されえないことは、何ら疑うことが出来ないことである。

エールフルト政庁への通達、それは、一部を変えながら他の政庁にも「閲覧や注意」のために送られたのだが、今日までその全貌がまだ十分に公表されてない次の文言だった。

> 同年５月27日の報告で、私たちはプロイセン政府によって命じられた、いわゆる幼稚園の閉鎖を承認します。この幼稚園は、ノルドハウゼンで（シュトルヒ博士夫妻の指導下で）フレーベルの原理によって設置されたものです。私たちは、同年６月にシュトルヒ牧師たちによって請願される幼稚園の指導についての許可を拒否します。同時に私たちは、王国政府に、将来似たような私的学校の設立については、時宜にかなった厳格な支配を行うことを推奨します。

エールフルト以外の政庁には、回状で次の一文が付け加えられた。

> パンフレット「カール・フレーベル等による少女と幼稚園のための高等専門学校」が明らかにしているように、幼稚園は、青少年を教育で無神論に誘導するフレーベルの社会主義的システムの一部です。それ故、フレーベルの、もしくは類似した原則で設立されたにちがいない学校等は、容認することは出来ません。

三つの通達全ては、二人の大臣によって署名されていて、連署にはシュティールによるものもあった。1851年８月23日に禁止令が公表された。二人のフレーベルと、彼の協力者たちは禁令をそのまま甘受するつもりは無かった。1851年８月25日に、フリードリヒ・フレーベルは「田舎新聞」（Dorfzeitung）のために声明書を執筆したが、それは1851年８月29日に公刊された。その声明

書のなかで彼は、禁令は「カール・フレーベルとフリードリヒ・フレーベルの名前、人格、課題、功績の取り違え」によるものであり、彼はハンブルグの高等専門学校にはいかなる関与もないと述べた。同様の内容は、確かに1851年８月27日のラウマー大臣への陳情書にもあったが、大臣はこの陳情書に対して1851年９月27日に次のように答えた。

> あなた方の27日の陳情書について、私は貴殿に答えます。あなた方の陳情書で括弧書きされた理由も、あなた方によって添えられた印刷物にある説明も、私が熟考を重ねて検討した、あなた方のシステムにしたがって設置され、指導されている幼稚園の禁令を再度破棄する魅力を提示しえません。

カール・フレーベルは、1851年８月27日と９月８日の書簡でも幼稚園を存続させることに努め、彼の叔父を擁護した。だが、これらの異議は十分な説明もなく拒否された。すでに1851年７月にフリードリヒ・フレーベルは、1851年９月27日から29日までの教育集会に招待状を送っていた。幼稚園禁令について明確に述べることなく、集会は幼稚園と幼稚園女教師養成におけるフレーベルの発達に即して教育する人間教育を守護する観点で行われた。有名な教育者とあまり有名でない教育者に並んで、以前のフレーベルの弟子たちが来た。初日は、ディースターベークが導き、二日目は、教会の幹部役員で視学官のマイニンゲンのペーター博士が、ワイマールの文化相フォン・ヴィーデンブルク（Wydenburk）出席のなかで導いた―両者は、全てのチューリンゲン公国のために計画されたが、でも実現されなかった学校規定のために相当尽力した―。三日目は、二人のコールバッハの教育者ケーラー（Koehler）とベック（Beck）だった。ペーター博士の提案で集会は、フレーベルに「自らの広範な仕事のなかにある全体のシステム」を説明してもらいたいこと、ディースターベークの提案で、フレーベルに「幼稚園女教師のために簡単な入門書」を仕上げてもらいたいことを決議した。フレーベルは、ミッデンドルフや他の協力者から言われていた条件のもとに同意した。ディースターベークはさらに次のことを行うように希望を述べた。「領邦の法律が許す限り、様々な都市でフリードリヒ・フレーベルのシステムに関する講座をもつこと、幼稚園を活性化させるために女性協会を設立すること」。ディースターベークの提案で、集会の決議には、彼によって記された「公的な声明」が採択された。そこには次のように記されていた。

> フレーベルの仕事は、「理論的にも実践的にも本質的に進歩的な教育学として見なされるべきである」。そして、「国の幼少の子どもや、全ての青少年のために働く者たちはみな、『幼稚園』や『リーベンシュタイン近郊のマリエンタールの幼稚園女教師養成学校』の導入と一層の発展を、国法の範囲内において支持する」。

二人のフレーベルの陳情書並びに「週報」の送付、ジャーナリズムでの論争、上述の教員集会の成果の公表、プロイセン内務相宛のベルリン警視総監フォン・ヒンケルデイ（Hinkeldey）の1851年９月15日の詳細な報告―文化相にも届いた―並びに以前はフレーベルの友人と自称したユリウス・フェルシング（Julius Fölsing）による出版、国王へのフレーベルの大々的で直接な陳情そして何よりも王宮自身でのフレーベルのための企ては、疑いなく国王に、二つの省による詳細な態度表明を促した。マリエンタールでのフレーベルの弟子アマーリエ・フォン・シュトゥックラート（Stueckradt）は、王妃の女官となったが、フレーベルへの手紙からも伺えるように、王宮での企てに尽力した。男爵夫人フォン・マーレンホルツ＝ビューローは、ハルフターによると、「おそらく王位後継者の第１の側近を通じて」フレーベルの直訴を届けさせた。そして、自らのために王妃の謁見を実現した。そのことについてシュトゥックラートは、1851年12月11日にフレーベルに宛てて次のように書いている。

> マーレンホルツ夫人は、多くのことを、おそらくあまりに多くのことをお話しました。というのも、それ以降王妃は私に幼稚園のことも、マリエンタールのことも、ご下問されないからです。そしていまや、遊具の説明にも興味を示されません。だから私には、私の考えを表出するあらゆる機会がやってきたのです。変化が起ころうが起こるまいが、私はこの時期にかけねばならないのです。

ディースターベークは、この謁見についてあきれながらも、1851年11月の終わりにフレーベル宛てに手紙を書いた。

> フォン・マーレンホルツ夫人は、たぶん、貴兄に王妃での謁見について述べたでしょう。謁見は、行われました。それで十分でしょう。A・フォン・シュトゥックラート夫人は、おそらくほくそ笑んだでしょう。彼女は陛下の身の回りのお世話をしているのですから。

それでフリードリヒ・ヴィルヘルム４世は、1851年11月14日に両大臣に、幼稚園禁令によって、小市民民主主義的運動に、とくに多大な打撃を与える刺激的な告知書を求めた。1851年10月末のフレーベルの直訴に関連して、

「フレーベルによって設立された、いわゆる幼稚園の理論と実践」が調査され、彼には「解答が･･･実際に設立された幼稚園と、自由信仰教団や札付きの民主主義者との非常に目立った関係が」つたえられたに違いなかった。1851年12月19日に大臣は告知したが、それは、1851年12月27日に国王による確認の後、1852年２月11日には、若干修正されたかたちで、政庁に訓令として届き、次の言葉で閉じた。

> この説明において王国政庁は、次のことに十分な動機を見出すであろう。つまり、フレーベルの幼稚園禁令を断固として維持すること、そして、フレーベルの原理が適用されることに、断固として反対することである。フレーベルの原理は、あちらこちらで目立とうとし、新聞ダネになろうとし、教育や授業で影響を与えようとするものだから。

この告知書は、その最も重要な意味はここで暗示されているだろうが、提出された報告書、とりわけ言及した差し押さえ書簡を伴ったヒンケルデイの報告書を利用して、また、印刷物、とくにカールとヨハンナ・フレーベルのパンフレット、フェルシング（Foelsing）の著書、フレーベルによって刊行された「週報」や他の出版物などを利用して作成されたのものである。

まず確かめておかねばならないことは、名前の取り違えなんてことはナンセンスだってこと―プロイセン政府は３名のフレーベルを完全に知っており、20年代はシュックマン相が、40年代にはアイヒホルンが、そして50年代にはラウマーが彼らに対峙していた。長い欄外のメモ書きにおいて、ラウマーは次のように述べた。

> 私の考えでは、フリードリヒ・フレーベルは次のことでのみ、カール・フレーベルと区別される。つまり、カールは自らの意図を明瞭に首尾一貫して表現するのに対して、フリードリヒは自らの意図を、非常に支離滅裂でミステリアスに表現するが、たぶん、よく分かっていないのだろう･･･私の考えでは、だから、フリードリヒ・フレーベルをカール・フレーベルとは違うと判断する何らの理由はないのである―ラウマー。９月１日。

報告者は次のことを、はっきりと強調した。「社会的政治学の著者であるユリウス・フレーベルの弟である、先に挙げたカール・フレーベルと、いわゆる幼稚園の設立者であるフリードリヒ・フレーベルとの違いと、同時に深部にある内的な結びつきは、十分に理解している」ことであり、「また、幼稚園のシステムの理論は、幼稚園に関連した文献、つまりフリードリヒ・フレーベル自身の著作に由来していることも」知っている。また次のことも強調した。幼稚園は、「フレーベルの社会主義的システムの一部を構成しており、子どもを、無神論や社会主義的原理に向けて育成しようとするものであること」、「この判断は、事実に関する我々の査問で十分に真実であることが確かめられた」。「幼稚園のシステムや実践が、とくに自由信仰教団やドイツ・カトリック教団のなかで、また、民主主義者のなかで重宝されたことからも、禁令が無条件に維持されるべきだと判断されるにちがいないと、いま、われわれは考える」。

「差しあたり、フリードリヒ・フレーベルの幼稚園と、宗教や政治の領域での破壊的な方向性との関係に関して、統計的には次のことが証明される。幼稚園は、北ドイツで、つまりノルドハウゼンや、ブレスラウ、ドレスデン、ハンブルクにおいて、このような方向性の傾向を最も親密に引き継ぎながら、フレーベルの幼稚園の熱烈な支持者によって設立され、大切にされている」。

フレーベルの幼稚園制度は、「自由信仰教団の支持者や民主主義者によって、彼らの目的を追求するのに適している」と見なされた。このことを証明するものとして、以下の人物が挙げられる。

１．バルツアー（Baltzer）は、「ハレの自由信仰教団」で言葉を残している。

２．ヴィルヘルム・ミッデンドルフ、「フリードリヒ・フレーベルの親しい友人で共同者。彼は、『週報』から論説を、1848年刊行の『幼稚園、時代の要請、統一的国民教育の基礎』から文章を引用しながら、次のように。「だからここでは、子どもたちは富者であろうが貧者であろうが、貴族であろうが賤民であろうが、いや、ユダヤ教徒であろうがキリスト教徒であろうが、さらにプロテスタントであろうがカトリックであろうが、みんな幸せで祝福されているのだ」。

３．「文士ルードビッヒ・シュトルヒ（Storch）」。彼は、「ブレーメンの牧師ドゥーロン（Dulon）に宛てた1850年５月18日付書簡で、とりわけ次のように述べた―フレーベルはドゥーロンと旅の途上、1847年８月末にマグデブルクで知り合ったのは確かだが、ドゥーロンは、その時はまだフレーベルも訪れたブレーメンにはいなかった―「幼稚園や、とくにフレーベルの幼稚園は、真に未来を建設する学校です。貴殿に、この新しい施設の崇高な目標に向き合っている貴殿に、余計なことを言うようですが、私がまだフレーベルについて存じなかったときに、貴殿は幼稚園について大変興味をもっていましたね。あらゆる真の民主主義者がそうですが･･･フレーベル自身が望み、私を急かすことは、私を北方ドイツの自由な都市へと向かわせること、そして、彼はハンブルクに必要な幼稚園を設立したので、彼はブレーメンを私に推薦し、貴殿のところへ行くように私に依頼したのです」。

4.「･･･文士、ルドルフ・ベンフェイ。彼は、以前ステッティン（Stettin）に居たころから、ドゥーロンの新聞や、ブレーメンの年代記や、雑誌「覚醒」（Wecker）に寄稿していましたが、ステッティンで刊行された「バルト海の番人」を編集し、その野党的傾向ゆえにハノーファーから追放され、また、国王陛下に対する畏怖を傷つけたことで取り調べを受けましたが、なによりも、いろいろなところから集めた書簡によると、彼は最も著名な民主主義者たちと不断に交流しており、1850年にはフリードリヒ・フレーベルのところで長期にわたり滞在していたのです。リーベンシュタインでの滞在と、フレーベルやフレーベルのところにいた他人から受けた要請を、彼は、当地で民主主義者として有名な書籍商シュタールガルト（Stargardt）に向けられた、そして彼のところで押収された書簡に非常に生き生きと描いています･･･」。

5.「元教師のヒールシャー（Hielscher）、いまハンブルク在住は、フリードリヒ・フレーベルの「週報」（Wochenschrft）の積極的な協力者です。彼は、３月革命ではバリケード戦士で、自らの書簡で戦闘行為を自慢し、その前の年には尖弾ライフルを準備していました」。ベルリンの教師ドレーガー（Dreger）に宛てた書簡で彼は、とりわけ詳細に、遊びや「遊具」の目的、手段、方法について語り、「庭や優しい小唄は･･･この施設から本当の子どもの天国を創り出します！ ･･･私は当然ながら、クソ坊主を潰すという課題を促すにあたり、特別な目的をもっていました･･･」。「私は老人フレーベルと知り合いました。この男は、支離滅裂かも知れませんが、彼のやろうとしていることは確かなことです」と彼は他の箇所で書いている。ディースターベークが、彼にハンブルクの幼稚園への扉を世話した。

6.「アウグステ・ヘルツ（Auguste Herz）、フレーベルの週報の積極的な協力者は･･･ドレスデン蜂起に参加したため有罪判決を受けた男性の妻。彼女の幼稚園は、警察署によって閉鎖されています」。

7.「ディースターベーク、彼はその影響力と活動で、権力によって学校制度が大きな不利益を受けましたが、民主派との結びつきを疑われておらず、フリードリヒ・フレーベルの熱心な支援者です。彼はフレーベルに･･･札つきのヒルシュベルクの教師ヴァンダーと一緒になって賞賛の言葉を捧げています。フレーベルはディースターベークと長い間交流し･･･あらゆる方法で、ディースターベークの利益のために活動しようしています」。

フレーベルの思想が、プロイセンでは「保守的で、オーソドックスなキリスト教徒たちのなかで何らの関心」も引かなかったとしても、彼の幼稚園は大きな不利益を被ったであろうと言われる。もう一度、シュトルヒやドゥーロンとの結びつきを思い起こし、フリードリヒ・フレーベルとカール・フレーベルのハンブルクでの活躍に注目し、すでに言及した、フリードリヒ・フレーベルの教えの下にいたのは「自由の信徒」のみだったという一節を導き出してみよう。それから、例として、「週報」からは、彼の「十分に無軌道で、危なっかしい立ち位置が･･･彼の教育システムのなかで」目を引く。告知書のほんの一節が、その重大性ゆえに、ここでは目を引く。「「人間の生の統一に向けての教育」という論説において･･･極端な汎神論が教えられる」。カール・グツコフ（Karl Gutzkow）、ルードヴィッヒ・フォイエルバッハ、ディースターベークたちの言葉が、「週報」に掲載されていたことは、同様に注目されることだ。調査者によって重要だったことは、幼稚園がそれまで維持してきた「システム」と「結果」であり、幼稚園の創設者のよく分からない性格ではなく、また、「フリードリヒ・フレーベルが重要視している･･･個々の絵や遊び等々 ･･･でもなかった。それらは、他の所では好意的に、むしろより良く推奨されているが、創設者が著作でオープンに語っているシステムや原則の根源的な内容とは反して、問題にされていない」。

リーベンシュタインの幼稚園が、「うまくいった」としたら、それは、「高貴な人たちの好意のおかげ」であって、それ故、「有害な芽はしばらくの間は、押しとどめられるだろう」。

> だから、幼稚園の活動の本質は変わっていません。子どもの遊びについての手元にある詳細な論述や、遊びに基づく教育は疑いもなく以下の判断に導きます。子どもの遊びに用いられる方法や指導は、遊んでいる者たちに、自らの行為に意味を与えさせて、早くから意識や熟考した活動を適切に呼び起こしますが、子どもらしい素直さや依存してくる心情を壊すものであり、その一方で、宗教的にも内容的にも首尾一貫したそれぞれの積極的なコントロールは、いろいろと考えるが信仰心のない軽薄なおしゃべりどもを育て、かれらのなかに、国民の不徳や住民の失墜へと導く十分な道具を提供しています。

ここにある事実は―同時代のまたは後の時代の刊行物にある多くの推論とは違って―反動勢力が根本的に３人のフレーベルや、彼らの見解に向き合ったこと、とくにフリードリヒ・フレーベルのヒューマンで民主的で、寛容的で汎神論的な世界観によって担われた見解を認識していたことを明瞭にしている。この見識は幼稚園のなかに表れており、とくに、小市民民主主義の代弁者たちによって、しばしば自由信仰教団のなかに入り込んで、多様なかたちで支持された。フレーベルたちは、無神論者ではなくキリスト教徒だった。彼らはこの時代に、社会主義者でも共産主義者でもなかったが、小市民民主主義者だった。反動による攻撃は、教育的・学校政治的領

域における小市民民主主義の進歩的思想に向けられ、そして、1854年のシュティールの規定にとっての「前奏曲」だった。

プロイセンにおける全幼稚園禁止令は、前奏曲で後奏曲だった。すでに1851年３月30日には、当時のケーニヒスベルクでルップ（Rupp）をリーダーとする自由信仰教団の幼稚園が閉鎖された。この年の夏に、フュルト（Fuerth）に自由信仰教団によって幼稚園の設置が予定されたとき、親たちは、プロテスタント教団の教会役員から、子どもをその幼稚園に送ることを警告された。幼稚園禁令後、警察は、自由信仰教団の女性協会（Verein）によって設立された幼稚園に厳しい態度で接した。その幼稚園には無宗派の女学校が接続されておて、そこではヘンリエッテ・ブレイマンが教えていたが、彼女は自由信仰教団員ではなかった。ブレイマンは―フレーベルと和解して―マリエンタールに戻った。ドレスデンでは、反動はヘルツ夫人の幼稚園に集中した。当地の省庁は、ベルリンから、ベンフェイ流にいえば、幼稚園は「青少年にとって最も効果的で民主的な育成学校（Pflanzschule）となるにちがいない」ことに、注意させられていた。警察の報告書には、ヘルツの幼稚園は、20名以上の、「その大部分は手工業者かそれ以下の階層出身者」によって登園されていることが指摘されている。幼稚園に対する最初の対策が講じられた。ディースターベークは、そのことについて、とくにヘルツに宛て、1851年７月24日に次のように書いた。

> あなたの教育舎の運命は何ら予期できないものではなくて、もはやそこには、ありません。政府は幼稚園のなかに、共産主義と社会主義の萌芽を発見しています。そして、幼稚園を告発し始めました。それがどれくらい広がるかを、誰が知り得るでしょうか。

またこの言葉には、「共産主義の亡霊」に対して「古いヨーロッパのあらゆる権力が･･･聖なる狩猟者へと」結びついたという『共産党宣言』におけるマルクスとエンゲルスの判断が映し出されている。だが、ヘルツに向けられた処置は、極めて反動的なザクセンの大臣ボイストには満足できるものではなかった。ドレスデンの郡の監督者は、ボイストの指示で、1851年８月19日に、市参事会員に次のような通達を早急に送らねばならなかった。

> 今まで出されてきた省の通達によると、市参事会は、このことで王国の文化・公教育相の不興を買ったことが明らかになるし、同時にまた、当地の学校視学官は今や即座に疑わしい幼稚園の無条件閉鎖を命ずるように指示されている。というのも、Dr.ヘルツも民主的党派に属しているということが、最新の信頼できる報告でもたらされたからだ。

ヘルツの抗議に対しては、1851年10月20日の返答書簡で、彼女に次の責任が負わせられた。彼女が「国体を転覆させる党派の札付きメンバーであったアウグステ・シャイベ（Auguste Scheibe）に、教育舎の暫定校長を委ねたこと。もし、彼女がシャイベの思想と違っていたなら、そんことはしなかったであろう」。1851年11月18日に、ドレスデンで公示されたことによると、児童保護施設（Kinderbewahranstalt）が国民学校制度の実施規則で「お世話学校」（Warteschule）に区分されているように、幼稚園は、公的な許可が必要であり、学校監督庁の監督下に置かれねばならないことになった。エアフルト政府がそう、1839年の類似した規則を用いたように、プロイセン政府も、1860年に幼稚園禁令を解除する際に、そのようなことをした。このようにして、幼稚園は確かにブルジョア的･ユンカー的学校制度に統合されたので、支配層にとっては、危険でないだけでなく、むしろ「利用しうるもの」になった。

王侯貴族の忠臣だったイダ・ゼーレ（Ida Seele）でさえ、嫌疑から免れなかった。彼女は、ダルムシュタットの自分の幼稚園では、「私たちの子どもたちの両親は、扇動的な要素から自由ではなかった」と述べた（『フレーベルの思い出（1888)』。彼女は「小民主主義者」であるとして非難された。というのも、彼女は蝶々の歌を、「党派的・反党派的」の意味で説明したからだ。

彼女は、『フレーベルの思い出』でさらに述べた。

> 私は、子どもたちの階層を越えてもっと多くのことを彼らに教育するべきでした。子どもたちは、そうです、純粋な標準語を話しました。彼らは行儀良く、お利口さんに振る舞いました。彼らは清潔で優しく見えました。彼らは多くの素敵な仕事を学びました―だから、豊かな人々の子どものみを教えることはできましたが、これらの子どもたちには、そのようなこと全ては不要だったのです。

ゼーレは、炭焼き人、家具職人、大工などの歌を歌うことによって、「手工業者身分の者」を「賛美し、過分に高め、敬意を表する」ことになるのだが。上司は、彼女にそのようなことについて、もう少し「世知に長ける」ように薦めた。説教者は、「労働者階級福祉（Wohl）協会」にいる彼女を「無神論」だと非難した。というのも、彼女の幼稚園を彼が訪れても、一度も「神」の名前が呼ばれず、賛美歌も歌われなかったから。ついに、「公国妃の女官のトップ」が現れて、ベルリンから、「フレーベルの熱心な門下生」であるゼーレを遠ざけなさいとする書簡が届いていることをゼーレに告げた。王妃は、「私

については何も懸念することありません」と返書したが、ゼーレはフレーベルとの文通を止めるように求められた―そして彼女はそうした！　禁令は、フレーベルの親戚縁者からの告発を伴った。ドイツの政府によって幼稚園が閉鎖され、フレーベルの友人、知人が迫害されている最中に、文献や書簡のなかでフレーベルの誓願をつよく支持する声は少なくなかった。とりわけディースターベークがそうだった。彼は友人を勇気づけると同時に、過度の期待には注意するように伝え、状況が明確になるまでは戦術的な自制を勧めた。フレーベルは知人や見知らぬ人たちから励ましの手紙をもらった。

1851年11月５日に、なかでもハンブルクのシュミーダー（Schmieder）がフレーベルに手紙を書いた。

> ･･･私は勝利を祝っていました。というのも、プロイセン禁令が出されたちょうどその時に、禁令によって私のところに多くの訪問者が来てくれたのです。そして全ての聖職者が私に賛意を表してくれました。警察署長が･･･私に自分の子どもの入園を申し込んだのです。

当時のブロムベルクの教師ダインハルト（Deinhardt）は、1851年９月４日に、フレーベルの事業を支持する内容の書簡を書いた。1852年５月12日には、ヤーンのお気に入りの体操者でフレーベルの古きリュッツオー義勇軍の戦友エドゥアルト・デューレ（Eduard Duerre）が手紙を書いた。

> 古き戦友よ･･･君に手紙を書いたのは、彼の批判に同調するためではなくて、反対に、彼は、自分があまりに不当に評価した犠牲者に何ら批判をなし得るものではないことを君に伝えたいからだ。私は人生に疲れている･･･だが､学校親方の集会のためにゴータにたぶん行くよ。そして当地で君と会える･･･そのことは素敵なことだ。そうでないときは、リーベンシュタインの君を訪ねるよ。

1852年６月３日、自らの死の前に、フレーベルは進歩的なドイツの教師の共感をもう一度受け取った｡その日、ベンフェイが主催したゴータでの教員集会で、フレーベルの功績が述べられた。だが、もう70歳のフレーベルにはあきらめが生じた。彼の友人であるヨセフ・メイアー（Joseph Meyer）は1849年にはもう、プロイセンの反動的役割を考慮して、「黒が正真正銘で―金と赤から―白となる」ことに気付いた。このような言葉と同じ使い方でフレーベルは、1851年８月26日にマリウス・ベントゼン（Marius Bendsen）に次のように書き送った。フレーベルにしてみるなら､結局は禁令の破棄には意味がない。「というのも、全てのドイツの子ども時代の生活が、黒と白の房がついた棺で埋葬されることが望まれたのだから･･･」。フレーベルは、そう30代半ばや40代半ばの頃のように、USAへの移住を考えた。Dr. シュトルヒによって、マリエンタールのフレーベルのところに、門下生として送られたエミーリエ・クナウアー（Emilie Knauer）は、今や、ハンブルクのフリードリヒ・ホフマンのところで幼稚園女教師をしていたが、1851年10月26日に、噂が本当かどうかを尋ねた。フレーベルは、シュトュックラート（Stueckradt）に、自分の意図に人はどう反応するだろうかと問い合わせた。彼女は1851年12月11日に次のように答えた。

> あなたは、前回の手紙で私に、アメリカに移住するというあなたの評判は、状況を悪くしたかどうかをお尋ねになりました｡友人たちは何ともありません。ですが､敵対者か､和らげて言うなら「反対者」は、騒ぎ立てることがなかったとしても、このことを自分たちの立場に利用することに、友人たち以上に、抜け目はなかったでしょう。

だがフレーベルは、移住を決意した。

1852年２月４日、彼の妻の兄弟であるフィラデルフィアにいるアウグスト・レヴィンに宛てた書簡に、彼はなお二つの立案を添えた。「アメリカの幼稚園」と「（アメリカ合衆国の光と精神に写された）マリエンタール・発達に即して教育する人間教育の全面的な生命統一のための教育舎」。この書簡への返信を、偉大な人間教育者であり、小市民民主主義の代弁者である子どもの友は、もはや生きて受け取ることはなかった。

1852年６月21日に、彼はマリエンタールで死去した。

８．政治的なフレーベル―あまり広く知られていないフレーベル

我々は、次のようにまとめることが出来ることを確認する。

１．フリードリヒ・フレーベルは、発達に即して教育する人間教育という自らの根本思想に、そしてそれを幼稚園に適用することに没頭した教育者である。彼の理論と実践の目的、内容、方法は民主的だったので、支配権力的な見解や実践とは対立していた。彼は、だから、そのような理論と実践によって、19世紀前半における広範に区分される小市民民主主義運動に政治的教育者（politischer　Paedagoge）として連なった―この運動は強さと弱さをもった。

彼の教育理論と実践の政治的危険性を､すでに､フレーベル後継者で彼と同等か類似した立場に立つ学校政治家や教育者のような、彼の近くに位置する同時代人が認識した。既述した1848年２月１日のマリウス・ベントゼン

のフレーベル宛ての書簡で、このかつての教え子は、次のように書いていた。

> もし政府が、あなたの教育の本質や目的について、はじめて明らかに理解したなら、政府はあなたの教育を進めることをやめるでしょう･･･そしてこの教育は、このような教育が有する価値を失なわせるために、政府の目的に従って作りかえられるに違いありません。どうして？　あなたの教育理念は、たしかに時代精神の発露で、そうでなければこの理念は現れてはいないでしょう。そしてあなたの教育理念は、時代の再内奥の努力と一致していますが、国の施設とは矛盾をきたしているのです･･･そのようなものだけが、国家の機械の歯車の軸としてのみ用いられ、うまく適合するのです･･･さて人間の精神的継続教育に関しては、我々は、水車小屋の棒が粉ひきによって決して大きくならずに、常に少しずつ小さくなるのを知ってます（例えば、多くの聖職者がそう）。だから、このような棒に向けて、政府は臣民が教育されるのを望みます。しかもそれが重要視されるのです。だからいま、そもそも国民はどういう状態ですか？　農民たちは？　みすぼらしく見えますね･･･どうして政府は国民が啓蒙されることを望まないのでしょうか？　それは、無知を有知としてごまかすことが、権謀術数上、容易だから。あなたの教育が、このようなことと全く対立していることは、ほとんど疑いないことなのです･･･

1851年11月末―それ故、プロイセン幼稚園禁令後―フレーベルは二つの書簡を受け取った。そこでは同一の評価が与えられていた。カール・ルードヴィッヒ・ヴィルト（Karl Ludwig Wild）―1830年から1843年までカイルハウの生徒―は、1851年11月28日にイエナからフレーベル宛ての書簡で、とくに以下のことを述べた。「確かな発展への移行の始まりが為されました。この始まりに私は、あなたの努力や、あなたの教育が証明する理にかなった宗教的に自由な教育を加えます･･･権力をまったく手中にするこれらの貴族たちに、あなたは、幼稚園の一般的な施設は非常に有益でためになるものだということを説得しようとするのですか？　結果はノーだ。プロイセン国王が、幼稚園を認めようとしないことは、彼の君主主義的な観点からするなら、全く正しいのです」。

二つ目の書簡は、フレーベルの親友ディースターベークからのものであり、彼はとくに以下のことを述べて、フレーベルの妥協を間接的に非難した。

> 幼稚園が道徳的、教育的に活動していることは、我々の反対者にはどうでもいいことなのです。彼らにとっては、幼稚園とその指導者が、直接に彼らの立場で活動していないことが重要なのです。そのことを彼らは見抜いており、我々が絶対主義に重しを据えたこと、その重しに向けて幼稚園が努力していることを彼らが述べたというのなら、彼らは盲目なんかではなかったに違いないのです。彼らは、私たちと同じように、幼稚園の状況を明瞭に理解しています。このように対立しているなかで仲裁は不可能です。また、いかなる隠し立ても、言い回しも、容認なども役には立ちません。権威主義的な人々、体制側信仰（Orthodox）の人々を、我々は味方にはしません。だから、断固として彼らに言ってやりましょう。我々は彼らを欲しないと。我々は力の限り、彼らをぶち壊すために活動すると。

フレーベルの甥ユリウスは、同様に、1890年の自らの回想録で振り返りながら、幼稚園禁令との関係を断言した。

> この幼稚園は、余りに罪のない、無邪気な年齢の子どもの活動のために捧げられたものと人は考えたにちがいなかったが、一方で、国家、教会、社会にとっての危険性が幼稚園には見いだされうるものであった。フリードリヒ・フレーベルの教育目的は、それでも深く熟考されているので、疑い深い鋭い嗅覚は、純然たる反動的な環境にとっては全く不当なものと感じとったものだ。それはちょうど、過激な教育制度改革の最も最初の出発点に、保守主義にとっての最も大きな危険に気付いたということだ。

フーフ（Hoof）が、1977年に「フレーベルが政治を為すために、政治について不断に述べる必要はなかった」と断言したことは、全く同意できる。東ドイツのフレーベル研究者は、自らの刊行物において、学術的行事において、常にこのような、フレーベルの学校政治的・教育的な理論と実践の断固とした政治的姿勢を指摘してきた。彼らは、また決してフレーベルが、無神論者ではなくて、もっとも信心深い宗教者であることを黙していたわけではなかった。彼らは同時に、また、フレーベルの自然科学に志向性のある弁証法的汎神論が、あらゆる宗派のキリスト教徒、ユダヤ教徒や仏教徒までにも、フレーベルの民主的で学校政治的・教育学的理念を評価させたことを強調した。1911年にはもう、社会民主主義者ハインリッヒ・シュルツ（Heinrich Schulz）が以下のように書いた。

> とくに、今日の幼稚園は、世俗の原則を強く犯している。前世紀の50年代にフレーベルの幼稚園がプロイセンで、無神論として禁止されてから、幼稚園思想の代弁者たちは、とくに熱心に、ちょうどこの非

難の不正を明らかにしようと骨折った。彼らはその際に、徹底して宗教的本性をもったフレーベル自身を、ある確実な程度まで、引き合いに出した。確かにフレーベルの宗教性は非常に汎神論的特徴をもち、宗派的な特別な結びつきや、ある種の宗教的不寛容は、ちょうど、フレーベルにおいて彼らの最も鋭い反対者を見いだしたのであろう。

ヒューマニスティックで民主的で、教育的でまた宗教的な基本姿勢は、我々が証明したように、フレーベルを、小市民民主主義を表出していた反体制派や個々人と結びつくことを必然ならしめた。同時に、そのことはフレーベルに―彼としては度々うまく切り抜けてきたものの―反動的勢力による迫害をもたらした。

２．フレーベルは、その政治的見解から小市民民主主義者だった。我々は、初出ではあるが極めて完全では無い遺稿や、後の刊行物によって、小市民民主主義の意味におけるフレーベルの多くの政治的発言を証明することが出来る。その際、我々は意識的に、往復書簡を引き合いに出したが、筆者がフレーベルに宛てた書簡でもないものもそうした。たとえ彼らが、自らの民主的な態度を確信していなかったとしてもだ。これらフレーベルの手元に入った数多くの書簡に、我々は彼自身の手による印「返信済」を認める。残念ながら我々はこれら返信済み書簡をほとんど再発見しないだろう。我々は、少なくないこれら書簡の筆者が迫害され、投獄されるか、移民したかを証明することが出来た。

この関係において、なお多くの事実が指摘される。まず第１に。フレーベルの活躍地は、迫害された者によって避難所として選ばれた。ユリウス・フレーベルは1847年にザクセンに行ったとき、フリードリヒ・フレーベルに宛てて、おそらくすぐに、「プロイセンによってここからの追放が要求されるに違いない場合･･･」、「訪問」することになるだろうと書き送った。カール・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヴァンダーは、1851年12月11日の書簡で、ディースターベークの勧めでフレーベルに次のことに答えて欲しいと願った。「時局によって圧迫された同志」として、お側近くで定住する可能性と、「大衆の最善のために非力」を捧げる可能性をヴァンダーのために与えてもらえるかどうかと。第２に。フレーベル自身が自らの住居を避難所として提供した。例えば、Dr. ハインリヒ・ヘルツ（Herz）の家族のために。それは、ヘルツとアマーリエ・クリューガーとの往復書簡から明らかとなる。そして第３に。シュタンゲルベルガー、ペーシェ、ベンフェイ、シャフナーなどなど迫害された者たちが、長期、短期にわたってマリーエンタールやカイルハウのフレーベルの所をアジール（避難所）としたこと。これらの事実でも、自称非政治的フリードリヒ・フレーベルというテーゼを十分に論駁する。

これまでに刊行された文献において筆者たちにとって―少なくとも幼稚園禁令との関係において―まさしく重要だったことは、フレーベルは狭義の意味で「政治的教育者」ではなかったという証明である。エドゥアルド・シュプランガーでさえ、フレーベルの文書「新しい年1836年は生命の革新を要求する」を評するにあたって、フランス1830年革命の影響を認めているのに、その後で、確かに慎重に表現しながら、「フレーベルの今日までの周知の著作において、我々は全くほとんど政治的立場を見いださない」と断言している。（『フレーベルに思想界から』1938）。

ヨハネス・プリューファーは、ドイツ教育・学校史学会によって始められたフレーベル全集1909/10の作業のはじめから、遺稿を使い、オットー・ヴェヒター（Otto Waechter）と共同でその作成に指導的に関わっていた。そしてまったく、その初刊の刊行が未確認な巻だが、フレーベルの生涯についての1927年の第三版で、次のように独りよがりに断言した。「フレーベルは、決して特定の政治的党派には所属しなかったし、決して政治的に活動しなかった」。（『フリードリヒ・フリードリヒ　その生涯と活動』1927）。

３．間違いなくフリードリヒ・フレーベルは、小市民民主主義運動の細分化の過程が生じた後では、穏健派に属し、ラジカルな共和派には属さなかった。自らの理想を貫徹することに没頭し、もはや70歳前後になったフレーベルは、諸侯個々人によって差し出された援助を喜んで受け取った。

フレーベルの「生の合一」という目的が、革命よりも先に、歴史的に必然的な憧憬だったなら、たとえ資本主義社会の視点では「見せかけの光輪」だったとしても、彼は革命が挫折して、幼稚園禁令が出された後も、この目標を階級の調和の意味で一層強く強調した。間違いなく階級の調和は、ずっと以前からこの生の合一のなかに隠されていた。1851年10月以来、彼が刊行した「フリードリヒ・フレーベルの事業誌･･･」の綱領にはこのような意味で次のように述べられている。

このような形（新たな雑誌を編集―筆者）を選んだのは、フリードリヒ・フレーベルの理想が、宮殿に住む上流階級と同様に、小屋に住む貧民にも平等に開かれることを渇望するからである。雑誌は、万人に平等の愛をもって歩まんとする。雑誌は、万人に、より良い、真実の人間教育を求める心情を目覚めさせるだろう･･･

幼稚園女教師マリア・クレーマー（Maria Kraemer）が、リーベンシュタインの教員祭（1851.09.29.）で、彼女

がヘッセン・フィリップスタール家の幼い王子の教育を引き受けたこと、そして王子が城館で行われた約30名の村の子どもたちの遊びに加わったことを報告したとき、フレーベルは感激して叫んだ。「そうして諸侯は最も早い時期に民衆のなかに導かれ、我々が求める王侯と民衆の間の絆や和合がはじめられるのです」。

フレーベルが、革命前や革命の最中にも、基本的には進歩的な政治と教育の統一を出発点としていたので、革命の失敗後に、かの確かに啓蒙主義に起因する教育の可能性の過大評価が明瞭となった。フレーベルは今や、1849年５月25日のヘルツ（Herz）への書簡から明らかなように、教育について全てを期待した—「教育が我々を唯一救えるのです」。彼がさらに、そのことについて、「真の政治は、教育の政治です」と述べたとき、ロールバッハはフレーベルに、権力者は、「自らの目的を達成するために」、教育の実際の可能性を同様に認識していることに注意を促した。「それ故、権力者は学校を監督する手綱をしっかり握って離さないのだ」と。

フレーベルの同志においても顕著となるのだが、教育を過大に評価することについて、彼の友人は、ちゃんと彼に注意を促した。幼稚園禁令と関連してディースターベークは、1851年11月の終わりに、フレーベルに次のように書き送った。

> 残念ながら幼稚園の事に関しては、風向きはまだ変化していませんでした。私もさしあたり、そのことに疑いをもちます。そもそも政治的状況において何らの変化が起こらない限り、期待はほとんど出来ませんし、全く想定することができません。

すでに1844年から45年への新年への挨拶状で、カール・ヴィルト（Karl Wild）は教育の影響力に関するフレーベルの幻想について注意を促した。

> 内面の幸福、魂の平安のための礎石は、確かに、理想のために真実が生きるところに確固として据えられるのです。だから、あなたのなかにおいてもです。でも、外的状況が—それは、自然に即する教育という理想が、最も幼い子ども時代から、人生において力強いかたちを獲得するという状況にまずなって欲しいのですが。でも、そのことは現在、その他のなお非常に病的な我が民族の状態と、もちろん関係しているのです。自然に即した青少年教育が全ての民衆生活を力強くするに違いないことは正しいことですが、また、このような自然に即した教育は、通常、このドイツ民族の徹底した再生が、政治面、社会面、宗教面で、そして将来の政変によってくる権力や、覚醒された民族の圧迫によって先行する場合にのみ、可能となることも確かなのです。このことは必然的に絡み合っているのです。

1851年11月28日のフレーベル宛ての書簡でヴィルトは、イエナ大学哲学学部に、彼の博士論文「フリードリヒ・フレーベル。彼の教育原理と教育方法」を提出したことを報告したが、彼はもう一度、フレーベルの当時の見解のこれらの弱点を繰り返したが、その際、ヴィルトによって多くの結論が引き出されたが、ここではそれらは同意されえないが、同様に、小市民民主義の弱点の表出として判断できる。

> 私は、教育とくに幼稚園の意義に関係して、国家的・社会的状況の人間らしい形成や成長にとって、あなたと一致することは出来ません。

彼は、ただ学位論文の結論に関連して、なお、幾たびもフレーベルの教育の可能性の過大評価を非難しながら、彼は、彼の論文の結論からとくに以下を引き出した。

> ･･･何らかの時代区分に教育の特徴をみなすことは、まあ、考えられることですが、それはそれとして、子どもの教育は･･･普通は、支配者の教育の結果としてのみ存在できるのであり、支配者の教育や時代の一定の生活の方向性を特徴付けるのです—だから、また、最近の直近の事件、政府の対策、並びに民衆の態度、教会と社会の分野での相互に敵対した努力、学術の成果、私たちの共通した、本当に好ましからざる状態は—真にヒューマニズムの要求は、普遍的に明瞭に認識され、それらの正当性において承認されるというフレーベルの想定と矛盾するのです。

フレーベルの甥カールやユリウスも、彼らの回想のなかで、彼らの叔父による教育に対する過大評価を非難した。カール・フレーベルは、その非難的でまたしばしば簡潔でもある様式で次のように書いた。

> 私の兄も、弟も、教育によって「上昇する人生の春」のために活動する素質も才能ももっていなかった。教育のみが、この素晴らしい目的を達成するために活躍するのではない。とくに鉄道だってそうだ！

ユリウス・フレーベルは、「左翼民主派」から穏健リベラル派になったが（以下の引用は暗示的）、彼の著作『ある人生』において次のように書いた。

> 教育力の自己顕示は･･･教育の使徒職におけるフリードヒ・フレーベルと彼の弟子たちの活動の最も重大な誤謬である—この誤謬は、私たちの時代の民主的な平等性志向と最も親密な関係にあった。

４．我々が、この研究を通じて、もう一度強調することは、フレーベルの公開・未公開の遺稿を全て開明できたわけでは決してないが、19世紀前半における小市民民主主義とフレーベルの関係の問題を明らかにしようとしたことである。その際、我々は小市民民主主義のグループや個々人とフレーベルの多様な関係を発見しただけでなく、とりわけ1848・49年の小市民民主主義革命期におけるフレーベルの政治的見解や態度も発見した。これらは、政治と教育の統一という視座の下、発達に即して教育する人間教育という彼のヒューマンで民主的な根本思想と相まって、自らの独特な個性的な鋳造において、彼自身を多彩な小市民民主主義運動の代弁者として証明している。それ故我々は、政治的フレーベルが、今日まで、まだまだ知られざるフレーベルであったと言うことができると思う。フレーベルが政治的な人間であったことは、カイルハウ時代から死の一年前の幼稚園禁令まで、彼がさらされた嫌疑、攻撃、迫害が物語っている。彼は、とりわけ彼の主たる教育活動である幼稚園に対する教育者としての熱心さから意見や態度で抗弁し、世界観的な不明瞭さと、そこから派生する神秘主義から抗弁し、小市民民主主義を全く際立たせた抗弁を行った。彼は、教育学の領域で最善の伝統を具現化した、小市民民主主義的代弁者であり、古典的ブルジョア教育学の代弁者であった。締めくくりに、フレーベルの死の数週間前に、カール・ヴィルトによって書かれた書簡から、48年革命家ローベルト・プルーツ（Robert Prutz）の評価を引用する。彼は、革命の敗北をまた、小市民民主主義における気骨の欠如に帰したが、その例外として他の者と並んでフレーベルを強調した。

それは、十分なる「物書き部屋もしくは演説壇の才能」を演じた。

> だが、全く我々に欠けていて、なお目下のところ欠けているのは、首尾一貫した意思と行為である。世の中の障害にも毅然と立ち向かう能力と勇気を自らにきちんと備えた個々人が欠けているのだ。そして、障害を乗り越え、致し方ない場合は、自らの身を滅ぼす危機を恐れない個々人なのだ。メンデルスゾーンの不屈さ、フォルスター（Forster）のエネルギー、ペスタロッチの不撓不屈、フリードリッヒ・フレーベルの未来を確信した歓喜それぞれの気骨である。

本稿は、Helmut König：Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts.Teil Ⅳ. IN：Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 27/1987 Berlin 1987. を邦訳したものである。筆者は、1988年４月15日にケーニヒ本人から直接邦訳の許可を得ている。なお、紙幅の都合から註釈の全てを削除した。邦訳することの意義は、本誌掲載の拙稿「ヘルムート・ケーニヒとフリードリヒ・フレーベル」において記した。